

石見銀山とその文化的景観

2007 年に石見銀山がユネスコ世界遺産に登録された際、主に 3 つの理由で評価されました。それはすなわち、16 世紀から 17 世紀初頭にかけて同銀山が世界経済に与えた影響、地域一帯に銀生産の考古学的証拠が良好な状態で保存されていること、そして銀山自体と鉱山集落から輸送路、港までのその関連遺構が一体化していることです。

石見の銀と世界貿易

石見銀山で採掘された銀は、1500 年代中盤以降、世界経済に大きな影響を与えました。当時、同銀山を管理していた各大名家は、海外との交易にこの銀を利用します。銀の需要は明朝よりもたらされます。銀本位の経済に移行したばかりだった明朝は、北西より侵略してくるモンゴル軍に対する防御資金を賄うため、大量の通貨を必要としていました。当初、銀は日本から直接中国に流入していましたが、この貿易の主導権はすぐにヨーロッパ人の手に渡ります。マカオを拠点とするポルトガル商人が中国の絹を買い、それを日本の銀と交換し、その銀を明朝に売っていたのです。この交易パターンは、ポルトガル人に莫大な富をもたらし、ポルトガル人は日本のことを「銀の国」と呼ぶようになり、石見の銀はポルトガルの海洋帝国全域で流通するようになります。現在では、1500 年代後半に世界中で取引された銀の総量のうち、少なくとも 10% は石見銀山のものであったと推測されています。この交易は、新しくできた徳川幕府が外国との接触を制限し、標準化された銀貨を導入する 1600 年代初頭まで大いに栄えました。

伝統的な銀生産

石見銀山が世界遺産の地位を得た 2 つ目の理由は、同地域で、伝統的な銀生産の物理的な痕跡が良好な状態で保存されているからです。石見銀山は、同地で銀が発見される 1527 年から 1923 年まで稼働していましたが、採掘装置や採掘手法が工業化されたのは、日本の鎖国政策が終了した後の 1800 年代後半になってからのことでした。その結果、石見銀山では、伝統的な採掘、製錬、精錬の考古学的証拠がそのままの状態に残されました。坑道、生産設備、集落の一部では発掘調査が行われ、来訪者は使用された技術や鉱山労働者とその家族が送った生活の様子を理解することができますが、仙ノ山の森に覆われた斜面や近くの谷には、他にも多くの遺跡がほとんど手付かずの状態に残されています。

全体像

石見銀山とその関連遺跡一港、街道、城その他の要塞、管理施設、居住区域、宗教遺跡一は、有機的統一体としてその姿を残しています。坑道や立坑の一部は中に入ることができ、銀山から日本海へと続く街道は歩くことができ、そして大森町ではこの地で財をなした商家の旧宅を訪れることができます。これらの史跡が一体となって、中世から 1920 年代までの鉱山を中心に成立したコミュニティの物語を今に伝えています。これらの史跡は、時間の経過と共に鉱山がいかに拡大し、各時代で

異なる目標を達成するために変化していったか、鉱山の周りにいかに高度に専門特化した経済が発展していったか、そして石見銀山で銀の採掘が行われた 400 年間、その運営がいかに進化していったかを明らかにしてくれます。